

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	聴覚的・直感的な言語・身体トレーニングとその教育的含意 SPAC 俳優による演劇ワークショップをとおして				
研究組織	代表者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・特任講師	氏名	小田 透
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・特任講師	氏名	小田 透

講演題目	
SPAC 俳優とのリズムと言葉のワークショップから見えてきたもの	
研究の目的、成果及び今後の展望	
<p>研究の目的：母国語であれ外国語であれ、感情豊かなコミュニケーションのためには、狭義の語学力だけでは不十分であり、発声技術や身体技法のような表現力が必要になってくる。しかしながら、まさにそのような非言語的な表現力こそ、本学の学生に大きく欠けているものでもある。本研究は、外国語学習に応用できるような声と体の運用法の構築を念頭に置きつつ、まずは、その基礎となる母国語の言語感覚や身体感覚を研ぎ澄ます訓練方法の案出を目的とした。そのための試みとして、本研究は、SPAC（静岡県舞台芸術センター）の協力のもと、演劇訓練の手法を取り入れたワークショップの開催を目指した。</p> <p>研究の成果：SPAC 俳優の吉見亮氏を講師として招聘し、学生、教職員、一般市民を対象とした対面のワークショップ「日常生活のための演劇ワークショップ——リズムと言葉の共通点」を2月末に2回、3月頭に2回、計4回開催した。参加人数は延べ29名（実人数16）で、年齢層は10代から70代まで幅広かった。2回ごとに実施したアンケートの集計結果（回答数16、回答率81%）によれば、約8割（回答数13）が、リズムや言葉にたいする意識に何らかの変化を感じていた。ワークショップの狙いは達成されたと言ってよいだろう。</p> <p>ワークショップは、平日の夜の18時30分から20時、静岡県立大学と静岡芸術劇場の2か所それぞれで、打楽器演奏を中心にしたものと、言葉のリズミクな発声にフォーカスした2種類のワークショップを行った。参加者は、打楽器を取り入れた演劇的なトレーニングをとおして、意味とはまた別の位相にある言葉のリズムそれ自体をあらためて意識するとともに、日常では用いることのないリズムで言葉を発することをつうじて、言葉の使い方や使われ方にたいする新たな意識や態度を獲得することができた。</p> <p>今後の展望：「安心して取り組める空間」のなかで「たくさんの発見や刺激」があったというコメントをいただいた。「[観劇のさいに] 作品自体のリズム感を楽しむ事ができるようになったと思う」という意見や、「講師の方々の醸し出す和気藹々として暖かな雰囲気、表現やアートを生活に取り入れることの大事さを感じました」という所見は、このようなワークショップが、芸術鑑賞のための手引きになるとともに、QOLの向上のための契機になるのではないかという可能性も見えてきた。今後も類似のイベントの開催を目指すとともに、本ワークショップで得られた知見を本学における英語教育に生かしていきたい。</p>	